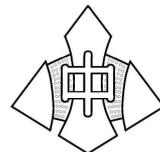


# 手をたずさえて

- 心身ともに健康で明朗な生徒
- 自主的に学習する生徒
- 責任を重んじ協調性のある生徒



令和2年12月23日（水）発行  
【発行責任者】郡山市立小原田中学校長 熊坂 洋

## 「一隅を照らす」 アフガニスタンに人生を捧げた中村 哲さん



### 「100の診療所より1本の用水路を…」

昨年12月、アフガニスタンで銃撃されて亡くなった医師中村哲さんの残した言葉です。中村さんは、今から36年前にハンセン病治療のためパキスタンで医療活動を始め、1991年には、アフガニスタンで初めて診療所を開設しました。しかし、2001年から始まったアメリカによるアフガニスタンでの軍事作戦などの影響で、現地での医療活動は大幅な縮小を余儀なくされました。さらに、この頃、アフガニスタンでは干ばつが悪化し、水不足による栄養失調や感染症が急増。このため中村さんは、医療活動と並行して井戸を掘る活動を始め、2006年までに飲料用の井戸およそ1600本と、かんがい用の井戸13本を掘りました。戦乱が続くアフガニスタンでは、干ばつと飢餓、病気、貧困も民衆を苦しめていました。難民は後を絶たず、傭兵（金銭などの利益により雇われ戦闘・闘争に参加する兵士のこと）を志願する男たちも出てくるなど、治安も悪化してきました。

診療所を開設し、医療に当たってきた中村さんは、「100の診療所より、1本の用水路が命を救う」と考え、「緑の大地計画」に乗り出しました。白衣を脱いだ中村さんは自ら土木技術を学び、用水路建設工事の先頭に立ちました。農民は村の再生をめざして協力し、人海戦術で水路を掘り進めました。最も難航したのは、大河から水を引く取水口の工事でした。失敗を繰り返しながら、日本の伝統的な治水工法を取り入れ成果を上げました。中村さんの不屈の姿勢とともに、現地の人達との深い信頼関係がそこにはありました。25kmに及ぶ用水路が完成し、荒涼とした大地は人間だけでなく、様々な動植物も生息できる緑豊かな大地へと変貌しました。過去と現在を比較する画像がテレビで映し出された時には、人々の苦闘をうかがうことができ、強く胸を打たれました。中村さんの活動によって、これまでに、福岡市の面積のほぼ半分に相当するおよそ1万6500ヘクタールでかんがいが行われ、65万人の生活が維持されていると言われて



荒涼とした大地が緑豊かな大地へ

なぜこのような人物がテロ行為による凶弾に倒れ、命を落とさなければいけないのか、その訃報を聞いた時、人間社会の「醜さ」や「理不尽さ」を強く感じました。残念でなりませんでした。

中村哲という人物は、自分の《生きることの意味》をアフガニスタンという国、そして、その国の人々に見だしていたのでしょうか。《だから、中村さんは、そこに身を置いて生きたのだろう。》と…まさに《命の水》、そして《アフガニスタン》に自分の人生を捧げた、と言えます。

（裏面へ続く）



